

神、あの偉大なる方

幾つかの宗教的経験の中で明瞭になってくる、神の現実のもうひとつの刻印は神の大きさ、偉大さであります。

聖書は全面的に神の偉大さに満ち溢れています。聖書が神の偉大さについて話す際に好んで用いるスタイルは、まず世界の権能の強大さを実感させておいて、その上で、その一切といえども神の前にあつては無であると言う、という方式です。聖書の最初の数頁には世界の創出についての激烈な讃歌が載っています。この世界の各領域が次々とわたしたちの眼の前に展開されていくのですが、それらはいずれも、神が言葉を発せられる度に、神の言葉に起因し、神の言葉の中から現れ出ていくのであります。世界の各領域はどれもあの方によって存在しています。そして、あの方ご自身は自らに起因して存在しておられます。あれらのものは、成るようにとあの方が指定されたものに成っています。あの方は、一に一切です。作業にあたつてあの方の手助けをする者は誰もいませんし、作業のための材料も設計図も予め他から与えられたものが眼前にあるわけではありません。一切はあの方おひとりによって成っていくのです。あの方は単に世界と較べて偉大であるのみではなく、絶対的に偉大であり、無条件に偉大なのであります。そして、世界はあの方によってのみ、そしてあの方の前においてのみ何かであることができるのです。この偉大さは自由です。命令は何の苦勞もなしに下されます。神が「成れ！」と言葉を発せら

れると、全ては成るのです。この偉大さは晴朗で、一切の秩序の源泉です。神のこの偉大さは、人間の反抗に突き当たるところでは、恐るべきものとなり、「神の怒り」に変わります。暴風、地震、旱魃^{かんばつ}、海の上での嵐といった自然界の破壊的な暴力は警告を与える啓示となっています（詩七五「七六」、九六「九七」など）。ただし、この恐ろしさは全面的に慈しみ深く、知恵深い仕方です、そう、濃やかな情のこもった仕方ですと言ってもよい仕方です縛られてもいます。乾坤^{けんこん}一擲^{てき}の勝負が始まる前の一刻、ご自分の預言者に向かって神は「嵐の中に」いるのでも、地震や火の中にいるのでもなく、密やかで優しい息遣いの中にいると、自ら教えておられます（王上一九・一一―一四）。

とはいえ、神の偉大さについての本来的な啓示が含まれているのは摂理の教えにおいてです。何でも知っているという全知は慄然とさせるものですし、何でも成しうるという全能は想像を絶するものですし、この現存在の、見渡すことのできないあらゆる糸を全て完全に制御している知恵などは当惑させるだけのものではありませんが、これらはいずれもそこでは純然たる愛となり、全き偉大さそのものである方は父親とえられるのです。

わたしたち人間の存在はあらゆるところで柵に突き当たっています。わたしたちの体格は一定の大きさのものですし、持っている財産は測られていますし、生き抜くための場となっている生活領域もその範囲は申告可能なものです。わたしたちのうちの誰もがその人特有の資質を持っていて、その資質がその人にいくつかの可能性を割り当てていると同時に、対応しうる範囲に限界

を引いてもいます。存在するというにおいて、所有するというにおいて、事物や人間との様々な関係において、わたしたちは絶えず、ここまでは行けるけれども、ここから先は駄目、という経験をしています。この一切は神にはありません。あの方は割り当てとか、制限とかいったものとは全く無縁で、一切であるとともに一切を持つてもおられる方であり、一切を包括している方、無限なる方であります。神の存在とは、その本質を汲み尽くすことなどできないもの、その足場の根底を究めることなどできない深いもの、その広がりを探り尽くすことなどできない広大なものです。そして、わたしたちが知っている高みなどはどれも、神が持つておられるあらゆる高みについての微かな想像でしかありません。

わたしたちの存在が限定されていると同じように、わたしたちの力も限定されています。わたしたちの成し遂げること、闘い、創作活動はいつも、ここから先はもう駄目だ、ここがわたしの知識の、自製の、造形の限界だとの意識に到達する点に必ず行き着いてしまいます。この言葉も神には存在しません。あの方には全てができます。あの方は創造することがおできになります、それも完全な形での命令をもってです。わたしたちにとっての「所与」であるこの世界は、その中の多様で豊かな形姿も、その数多くの法則も、全容を見極めることはできない程の大小さまざまな造形物も全て、神の言葉に発し、神の言葉の中から現れ出てきたものです。

この言葉をもってもまだ十分に言い尽くしたことはありません。「偉大」にしているものは、存在と力の程度だけではありません、否、第一義的にすらそうではないのです。そうではなく、この価値の充満と格ということなのであります。存在者というものは、その存在者の本質が高貴

になればなる程、そのものの心情が善いものとなればなる程、偉大です。数十センチしかない小さな絵でも、もしこの絵のほうที่ 清らかな意味に満ちていて、完成度も高いものであるなら、壁全体を覆っている絵より「偉大」ということがありうるのです。神は単に全き現実であるのみでなく、全き善でもあります。わたしたちが「真理」という言葉を口にするとき、わたしたちが言っているのは、一切を包括しているあの意味充滿、「いかなる暗さも残さない」意味のあの純粹の明け、つまり、あの方ご自身であるあの意味充滿、あの意味の明けのことなのであります。「義しさ」、「清らかさ」、「秩序」などは、わたしたちがあの方を指す際の指し方なのです。「美しさ」とは基本的には概念ではなく、全面的にあの方だけに属している一名称なのです。価値——善、真、貴、美——とは、或る存在者を、存在する権利を持つものとしてゐるものです。神は価値を欲しておられるだけでなく、また、価値を獲得すべく努力したり、占有したりしておられるのみでもなく、価値そのものです。そして、創造された価値は全て、あの方の輝きの反映でしかありません。ですから、神の現実は、言うならば、どの箇所をとってみても正当なものなのです。神のみが、自らの本質に固着する仕方、かつ自らに起因する仕方、存在する権利を持つておられます。単なる裸の存在は、生氣のない陰気なもので、重荷になるだけでしかありません。そのような存在を晴朗なものとしているのが価値です。それ故にこそ聖書は、「神は光であり、神の中には闇はありません」（一ヨハ一・五）と言っているのです。ところで、わたしたちが既に見てきたように、この偉大さは全くの温かさ、優しさであり、全くの愛そのものであり、あらゆるプレゼントをすることができるだけでなく、自分ご自身をプレゼントすることもおできになるの

です。

そして、最後に付け加えるなら、生きていくとは、わたしたちが呼吸し、成長し、労働し、創造し、定めを経験していくことだけでなく、わたしたちがわたしたち自身を生き抜く、そうしていくことによって、わたしたちの現実を覚っていくことでもあります。けれども、この点では、わたしたちは何と早いこと力尽きてしまうことでしょうか！ どれほど多くの、生き抜いてはいないこと、否、生き抜くことのできないことがわたしたちの中にはあることでしょう！ 神は知っている者、あの知者です。この言葉の意味していることが、神は世界と人間のことを知り抜いておられるということではなく、ご自身のことを知り抜いておられる、無限の存在者たる自分ご自身を生き抜き、知り抜いておられるということであることは、事の本質からして当然です。あの方は徹頭徹尾ご自身を明晰に見ておられ、ご自身の素晴らしさを感じし尽くしておられ、ご自身の存在の、想像を絶する重量をご自分の意志の清らかなる自由をもって担い抜いておられるのです。

このような考察の中からわたしたちのほうへと歩み寄ってきているのが、神の偉大さです。それは、どのような尺度をも超えている偉大さであります。が、節度を外れたもの、不格好なもの、奇怪なものは何も含んでいない、全く明るく軽快で、統御されている偉大さ、一言で言うなら、完全である偉大さであります。

礼 拝

この偉大さを前にして、人間は身を屈します。ただし、小さな存在である人間はこの偉大さに対しては引けを取っているという意味において、単に事実上身を屈するのみでなく、内奥から、帰依という空間の中で、敬虔の念をもってそうするのです。それも、或る程度までということではなく、さらには、とても深く、ないしは自ら進んで極めて快くそうするということだけでもなく、創造者の前における被造物として、全面的に、究極的決定的に身を屈するのです。ということは即ち、礼拝するということです。礼拝するとは、神は端的に「大きく」、人間は同じく端的に「小さい」という事実を、生きている者として実行することです。神が自らによって、自らの中で存立しておられるに對し、人間は神によって、神の権能の中で存立しているという事実を、生きている者として実行することです。礼拝が言っていることは、「あなたは神であり、わたしは人間です。あなたは真に存在しておられる方であり、あなたご自身に起因する仕方で、本質に固着する仕方で、しかも永遠に存在しておられ、わたしはあなたによって、あなたの前でしか存在していません。あなたは本質の一切の権能を、価値の一切の充満を、意味の一切の主権を持っておられます。あなたはあなたご自身の主であり、あなたご自身を充たし幸福にしておられます。それに反して、わたしの現存在の意味がわたしに与えられるのは、あなたによってです。そして、わたしが生きているのはあなたという光のお蔭であり、わたしの現存在の尺度はどれもみな、あなたの中にあります」ということなのです。

その際、大切なことがあります。これは、本来はもう述べてあることなのですが、ここで特に取り上げておかねばなりません。祈る人が、礼拝するという仕方では神の前で身をかがめるのは、人間よりも神のほうが偉大であるから、そう、比較することもできないほど、端的に偉大で権能ある方であるからという理由の故ではありません。偉大さという事実がもたらす効果は、人間は神と張り合うことなどせず、屈伏しなければならぬ筈ということだけでしかない筈です。礼拝するという仕方では人が祈るのは、そのような理由からではなく、そうすることがそれ自体において真理であり真正であるという理由からなのです。もし礼拝の言っていることが「あなたのはうがわたしより偉大ですから、わたしはあなたのみ前で身を屈します」ということでしかないとするなら、それは、弱々しいものですし、最終的には相応しいものでもありません。けれども、礼拝は、「わたしがこうして身を屈するのは、そうすることによってあなたが相応しい方であらうからです。わたしは、あなたが単に現実であるのみでなく、真理でもあることを認識しました。単に権能であるだけでなく、善でもあることを、単に重圧と権力であるだけでなく、無限の価値でも、意味そのものでもあることを認識しました」と言っているのです。

人間の現存在においては、権能と権利、力と価値、現実と真理、存在と尊厳は遠く掛け離れています。この故にこそ、人間の現存在はこれ程までに流動的で疑わしいものとなるのです。この現存在は、絶え間なき努力を要請しています、しかも、深い徒労感を与えることも稀でありません。神においてはそうではありません。人間がどこで神に出会おうとしても、出会った時には必ず、神の権能の中に権利をも見出しますし、神の偉大さの中に尊厳をも見出すのです。神は、存在に

関して存在しておられると同じだけ、心情、生命、活動などなどに関しても存在しておられます。そして、まさにこのことが礼拝においては表現されることになります。単に全くの「現実でしかない神、全能であるだけの神など人間は礼拝することはできないものです。このような神に対して人間は逆らうことなどなせず、直ちに、それも救いようのない仕方で降伏することにはなるでありましょうが、このような神を礼拝することは、自らの人格の尊厳ゆえに人間は拒否せざるをえないでありましょう。礼拝するという意味で身をかがめるということは、身体がしているのみでなく、自由を備えた人格がしていることでもあります。そして、人格がそうすることができるのは、尊厳ある仕方においてのみです。神における存在と意味のあの一致がこうすることを可能としているのです——黙示録の中のあの偉大な形象を見てください。あの場面では二十四人の最長老の人々、人間世界における最後の托身となったあの長老たちが、玉座に座しておられるあの方の前で自分たちの冠を脱ぎ、身を屈して、「おお、主よ、わたしたちの神よ、あなたは賛美と栄誉と権能を受けるに相応しい方です」(四・一一)との言葉を発するのです。(原註13)

礼拝ということは人間の宗教生活にとってのみならず、霊的精神的生活にとっても極めて大きな意味を持っています。身体にとっての空間秩序と同じように、知覚にとっての光と同じように、霊的精神的生活にとつての思考法則と同じように、礼拝は霊的精神的生活にとつて必要なものです。本来の意味での人間的現存在は真理の上に基盤を置いています、あらゆる真理の根本は、神のみが、あの方おひとりのみが神であり、人間は人間でしかなく、神の被造物でしかないとい

うことであります。この真理を承認し、この真理と真剣に取り組むときのみ、人間は健康でいられるのです。ところで、礼拝とは、この真理がその都度改めて輝き出てくるとともに、改めて承認され、実行されることになる積極行為を形成しているものなのです。

ですからこそ、わたしたちは礼拝を実践しなければならないのです。わたしたちは、「祈る」と「願う」を混同しすぎています。もちろん、わたしたちは願うこともすべきですが、この点に關しては、わたしたちは主が山上の説教の中で、「あなたがたの父は、あなたがたが何を必要としているのか、あなたがたがそれをあの方のところへ請いに行く以前から、既にもうご存じです」(マタ六・八)と言われたことを忘れてはなりません。礼拝は願いと同じくらい大切であること、否、おそらくはそれ以上に大切であることを、わたしたちは忘れがちです。ですから、わたしたちは礼拝を実践しなければなりません。わたしたちの心を統一することを、心を統一しているなかで、わたしたちの前に神の偉大さを現在させてみることを、この偉大さの前で畏敬をもって、しかもわたしたちの心の自由をも保ちつつ、わたしたちの身をかがめることを実践しなければなりません。そのようにするとき、わたしたちの中には真理が、生命の真理があります。現存在のあらゆる關係に秩序が戻ってきます。尺度も正しいものとなってきます。この真理はわたしたちの為になるものです。この真理は、生活の乱れと欺瞞によって滅茶苦茶になってしまったものを再び正してくれる筈です。わたしたちは靈的精神的に健康になり、新たに開始することができるようになります。